



岡谷市の『医療崩壊』を防ぐために

平成 20 年 4 月、昭和伊南総合病院は産科を休止、伊那中央病院と飯田市立病院は里帰り出産の受け入れの休止を決めました。お産の現場の「崩壊」が止まりません。

岡谷市は現在一診療所で年間約 230、一病院で約 180 の分娩を扱っています。病院では約 120 の婦人科の手術も行われています。この重責を担っているのはわずか 3 人の産婦人科医です。産科医療の「崩壊」の波がいつ岡谷を訪れても不思議ではありません。

今年 8 月 29 日奈良県で夜中にスーパーにいた妊娠七ヶ月の女性が下腹部から出血し救急車を要請、救急隊は 9 ケ所の病院に受け入れを断られ、「たらい回し」された結果、救急車内で流産した・・・という記事が報道されました。

しかし、この報道は不正確で、真実を伝えていません。

この妊婦さんは妊婦健診を一度も受けておらず、かかりつけの産科医がいませんでした。妊娠中になにか突発的なことが起こったら、まずかかりつけ医に電話で連絡して指示を仰ぐのが常識でしょう。また「たらい回し」という言葉は、搬送先から次の病院へと転送させられることを言いますが、このケースでは電話での収容要請を断られただけであり、「たらい回し」でもなんでもありません。

第三に、この事例は「子宮内胎児死亡」であったことがわかっています。つまりこの胎児は救急車を呼ぶ前から胎内で死亡していたわけで、救急搬送が遅くなったから死産になった、というわけではないのです。

この事例のこうした事情をご存知の方はどれだけいらっしゃいましたでしょうか？最近のマスコ

ミ報道はこのような謂れの無い医療バッシングに満ちています。

救急搬送拒否を批判するのではなく、背景にある医師不足の実態に目を向けなければ、医療崩壊は確実に進んでいってしまいます。

医療に対する正しい理解が不足しています。出産は無事に生まれて当り前、という誤解があります。医療の進歩により妊娠・出産における安全性は劇的に改善しましたが、それでも出産で命を落としたり後遺症を残したりする事はあるのです。一生懸命最善を尽くしても不幸な結果に終わったら賠償責任を問われるばかりか犯罪者扱いされてしまうとしたら・・・そんな仕事をする医師がいなくなっても当然ではないでしょうか？心折れて第一線から退いた産科医がどれほどいることでしょうか。

長野県の医師不足は深刻で、すべての科で不足しています。しかし医師養成には十年かかります。今すぐのできる対策は、今激務に耐えて働いている医師の苦悩を、市民の理解と感謝の言葉で少しでも和らげることではないでしょうか。患者さんの理解なくして、医師を留める手立てはありません。

【広報おかや 12 月 1 日号掲載】